

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

現図曼荼羅の成立に関する研究
—空海請来本系にみる図様改変の問題を中心に—

氏 名

中村 夏葉

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、弘法大師空海（774—835）が唐より請来した金剛界と胎蔵からなる両部曼荼羅について考察したものである。空海が中国より請来した両部曼荼羅原本は残念ながら現存しないが、空海が天長年間（824—834）に制作させたと考えられる神護寺の高雄曼荼羅が残されている。この高雄曼荼羅を筆頭に、日本の後世に制作された曼荼羅図について、基本的な構造と尊像配置が同じである作例は、空海請来本系の曼荼羅図として広く現図曼荼羅と呼ばれている。

現図曼荼羅の大きな特徴は、所依經典に比較的忠実であるとされるインド・チベット系の曼荼羅図に比べて異なる点が多いことであり、尊容だけではなく、尊像数の増加や配置、内部構造などをはじめ多岐にわたり、中国において大幅な再構成を経ていることが明らかである。これまでの曼荼羅研究では、各尊像の図像的変遷や新出尊像の所依經典の特定などが中心的に行われてきたが、それらは部分的な問題にとどまり、現図の全体的な構成原理の解明についての議論には展開していない。そこで、中国で改変された現図曼荼羅自体が有する曼荼羅世界のイメージ、及び表現プログラムの解明を目標として、本論文では、各部分の図像的特徴や構図について、曼荼羅図全体における位置づけや機能といった視点から再検討を行い、金剛界と胎蔵をそれぞれ個別の成立問題として扱うのではなく、両部一具の構成において、各図像的特徴がどのように機能するものとして構想されたかという視点から図像解釈を試みた。

本論文は、第一部（胎蔵曼荼羅）と第二部（金剛界曼荼羅）に両部を分けて構成しているが、各章は金胎を相互に横断する内容となっている。そこで、その起点となる第一部・第一章「虚空蔵院の構成原理—胎蔵における空間把握と表現—」では、従来から認識されていた現図胎蔵における虚空蔵院の重要性について、新たに中尊虚空蔵

菩薩の五仏宝冠と宝蓮華座という図像的特徴、そして同院両端に表された千手観音と金剛蔵王の大きさと宝蓮華座、加えて飛天を伴うという特徴に注目して、同院が表す象徴性の背景には須弥山世界のイメージがあることを指摘した。またこのことは、現図胎蔵において、本来は曼荼羅の楼閣内部では表現されることのない外部世界のイメージを取り込んで図様を再構成したことを明らかにした。

第一部・第二章「現図胎蔵の画面構成における門の機能—釈迦院と文殊院を中心に—」では、前章の構図分析によって明かとなった現図胎蔵における門の配置の特徴を踏まえて、特に釈迦院と文殊院に表される門の機能的象徴性を考察した。釈迦院と文殊院に門が表示されることは、従来、両尊が第二重と第三重の諸院において中心的な尊格であったことが一つの可能性として考えられると指摘されていたが、尊像の表現に基づいて諸尊の重要度を比較すると、特に門が表示されない虚空蔵菩薩が持つ五仏宝冠と宝蓮華座のモチーフを、両尊はどちらも全く有していないことから、両尊に門が表示されるのは並列的な諸院間における主尊である表示とは考えられず、むしろ、前章で提示した虚空蔵院に暗示される須弥山山頂で展開する中台八葉院と第一重諸院によって示される法界との文脈の違いを示す表示であると考えた。その役割は、両尊がそれぞれの重郭の主尊とされる所以である本質的な性格、即ち「利他」というテーマを表すためのものであることを指摘した。

第二部・第一章「成身会四大神について—金剛界における空間把握と表現—」では、第一部・第一章で検討した胎蔵における空間把握の問題を踏まえて、現図金剛界成身会の新出尊像である四大神を取り上げ、現図金剛界における空間イメージとその表現について検討した。両手を広げて成身会の大円輪を支えもつように表される同像は、五輪観に基づき、空輪を除く地・水・火・風の四輪を図像化し、空輪である大円輪を支えていると解釈されてきたが、その根拠は明かではなかった。そこで各種の図像を検討した結果、石田尚豊氏によって、「胎蔵旧図様」と現図とをつなぐ過渡期的な位置にあることが指摘された「四種護摩本尊及眷属図像」等に現図四大神と類似する図像を表す曼荼羅図があることが判明し、この曼荼羅図が善無畏の『尊勝儀軌』に基づく尊勝曼荼羅であり、更に尊勝曼荼羅を説く諸儀軌の中で『尊勝儀軌』が唯一、曼荼羅建立の前提として五輪観を詳細に説いていることを明らかにした。その所説から問題の尊像が四輪を図像化した四大神であることが指摘できることから、現図の四大神も伝統的解釈と同様に四輪の図像化であると考えられる結果を得たことにより、現図

金剛界においても、楼閣の外部空間のイメージが曼荼羅内部に取り込まれている可能性が高いことを指摘した。

第二部・第二章では、第一部・第一章の考察の端緒となった五仏宝冠の問題を金剛界に展開して考察した。特に四印会大日如来の宝冠にみられる通例の五体の化仏ではなく四体の化仏が表されている図像的特徴を起点として、「五部心観」との比較を行い、金剛界九会の上段三会の構成原理について検討し、現図では、究極の完成形を五仏宝冠の一印会大日として示し、左右に金剛界如来となった自利的側面から四仏宝冠の四印会大日と、自利完成後の利他へ向かう五仏宝冠の金剛薩埵像を配していることを指摘し、自利と利他を視覚的に明示することが現図の構成原理の一端である可能性を改めて明らかにした。

最終章の附論では、なぜこうした構想のもとで曼荼羅の図様改変が行われたのかについて、現図の成立に関与したことが考えられる青龍寺の恵果に焦点を当て、歴史的な背景から考察を試みた。恵果の俗弟子である呉殷が記した「恵果阿闍梨行状」や空海の「恵果和尚碑」に記された恵果は、師不空の密教を相承しながらも、不空にはない両部の付法を行い、財施を全て曼荼羅の建立に充てて、青龍寺の堂塔の内外に多くの曼荼羅を描かせていた。そのため、青龍寺においては、容易に人目につく外部壁面に曼荼羅が描かれている可能性が考えられた。本来、灌頂儀礼に用いるために建立され、儀礼の中で受者だけに見ることが許され、口外することを固く戒める非公開的な性質を持つ曼荼羅が、不特定多数の人々の目に留まる外部に描かれていたことは、換言すると、多くの人々に積極的に「見せる」という意識が根底にあることが考えられ、それは「恵果阿闍梨行状」に、曼荼羅を図絵する目的を、「人々が曼荼羅を一たび見て、一たび礼することによって罪を消して福を積むためである」と常に門人に語っていたと記されていることにも端的に表れていることを指摘し、こうした衆生救済のための布教手段として曼荼羅を積極的に見せようとする意識は、おのずと、いかに見せるかという意識を引き起こし、現図の種々の改変につながったのではないかと結論づけた。